

Viator

VOL.28



キリストは復活し、復活の力によって私たちを導く

北白川教会主任司祭セルジュ・ウィリアム神父

イエスは生きておられる、アレルヤ。

イエスは復活された、アレルヤ。

復活節がやってきました。みなさんはそれぞれ、
現在与えられているコミュニケーションのやり

方で、復活節を過ごされることと思います。その
なかでも、より盛大に祭儀を祝うことのできる

日々を待ち望みましょう。世界各地で、さまざまな国や言語、文化、人々の織りなす大陸ではキリストの復活を祝う「アレルヤ」の声が鳴り響いています。私たちはコロナ禍にもかかわらず、死に打ち勝ったキリストへの信仰によって一つになります。復活の喜びは、今まだ私たちがコロナ禍によって経験しているような人間の苦悩をすべて乗り越えるものです。キリストの復活とは、生命が死よりもずっと強く、善は死よりもずっと強いことを意味するものです。復活の光は人類の闇を照らします。ですから、いつも死者の中から復活されたイエス・キリストへの信頼を持つようではありませんか。

イエスはこの世のためにご自分の生命を与えました。そこで少しの時間をとって、御言葉をゆ

っくりと読んでみましょう。生まれたばかりの教会はか弱く、また貧しいものです。そこで、憐れみから生まれた教会を読み解き、黙想し、祈り、よく考えてみましょう。使徒によって作られた教会を学び、改めて教会を大切にしよう学びましょう。この教会は力強い主の力に支えられているのです。復活祭とは、私たちが大切にしている教会の顔でもあるのです。キリスト教徒の家族は愛やゆるしを第一に考えますが、そのような家族とともに、司祭や助祭、修道者や信者もまた、病人や試練に遭う人々のため、また若者の教育のためにも手を取り合い、つつましくも働いているのです。

みなさま、よき復活節をお過ごしください。

マルコ福音書の復活物語

今年B年の復活徹夜祭の福音朗読箇所はマルコ福音書16章1-7(8)節。この箇所ではイエスの復活を祝うのは教会にとって勇気が要ること。日本でなどミサでは読まれないが、8節に次のようにあるからだ。「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」。

よく知られているように、もともとのマルコ福音書はこの文で終わる。マルコ福音書は4つの福音書の中で最初に書かれた福音書だから、復活とはどういうことかを知るためにもっとも読むべきなのがこの箇所だ。しかし、初代教会の時代から、信者たちはこの箇所にショックを受け、おそらくそのショックを和らげるために、他の福音書を参考に書かれた別のテキスト

(当教会サイト「毎週の聖句と黙想」より転載)が付け足された(マルコ16章9-20節)と考えられる。だから、マルコ福音書には二つの末尾がある。マルコが書いた末尾と、他の福音書を参考に後から付け足された末尾であり、私たちが読む聖書はその末尾で終わっている。

今日の箇所、特に8節は、イエスの復活を信じる私たちを戸惑わせる。イエスの復活を見ていない私たちは、イエスの復活物語を読む時、当然、復活の様子についての記述や、目撃した人たちの証言と彼らの喜びや興奮などを期待する。しかし、この箇所は、私たちの期待を完全に裏切る。たとえばイエスが墓から出る様子についてはまったく書かれていない。そのような記述は2、3世紀になってはじめて出てくる。

その代わり今日の箇所から見て取られるのは、婦人たちがイスラエルの律法にまだしばら

れていること。彼女たちは墓に行くのに安息日を避けて、イエスの死後3日目まで待ったのだ。イエスが自分の復活を生前に予告していたにもかかわらず、イエスの復活をまったく予期していなかった婦人たち。彼女たちが墓に行ったのは、生きている愛する者に会うためではなく、尊敬していた先生の遺体を律法に従って処置するためだった。

続いて書かれているのは、大きな石についての心配。「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」。この言葉は彼女たちの内面を表現している。婦人たちは石のことを心配し、イエスについては死んでいるとばかり思っていたのだ。その石はしかし、すでにわきに転がしてあり、彼女たちは白い服を着た人（天使）から、イエスが復活したと告げられる。

天使は、ガリラヤに行くように弟子たちに伝えるという任務を彼女たちに与える。この婦人たちは生前のイエスの周りにいたが、世話をするボランティアではあっても本格的な弟子ではなかった。その彼女たちにはじめて任務が与えられたのであり、その任務は本来の弟子たちに伝えるという任務だ。ここには役割の逆転がある。それにもかかわらず、彼女たちは恐怖に圧倒されて伝えに行かない。マルコが使う「恐れ」という言葉は、旧約聖書でも（たとえば創世記でも）神に出会った時の気持ちを表現する。しかし、彼女たちは復活の証人であるのに、その出来事を前にして喜びではなく恐れを抱く。十字架の経験の後に、イエスが生きていると言われてどうして黙っていることができたのか。復活とは何のことか。

今日の箇所には後から付け加えられた箇所にも、私たちの常識や期待を裏切る記述がある。「彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、

信じなかった」(16・11)。その後、イエスは弟子たちのそのような態度を叱る(16・14)。

復活徹夜祭の夜は教会にとって、一年でもっとも聖なる夜だ。その夜、教会は、イエスの復活というもっとも大切なメッセージを伝えるために、信じる難しさを表現するこのような箇所を選んだ。この箇所を飛ばしたり他の福音書を参照したりせずに、この箇所にとどまって反省することがとても大切だ。この箇所に私たちの信仰の分かれ目があるからだ—私たちの信仰が表面的な信仰か深い信仰か、もっとはっきり言うと、名前だけのキリスト者か、本物のキリスト者か。

そのほか、ガリラヤに行くようにという指示も単純な理解に反している。ふつうに考えると、イエスはエルサレムで死んで、エルサレムで葬られたのだから、もしイエスが生きているなら、エルサレムにいると考えられる。それなのに、なぜ、歩いて3日以上かかるガリラヤに行くのか。しかし、ここで扱われている問題は、イエスをどこで探せばいいかという問題なのだ。復活の主日に読まれる福音箇所にあるように、ヨハネとペトロもそうだ。墓にいないとマグダラのマリアに告げられたのに墓に行く。生きている人を死んだ人の中に探してもいないのに、世界中で墓にだけは行く必要がないのに。彼らは混乱している。

このような記述でマルコは私たちに何を伝えたいのか。イエスの復活は私たちの信仰の核心だ。しかし、死を通過して生きているイエスに出会うのは単純なことではない。私たちキリスト者も復活について当たり前のことのように話したりするが、マルコにとってはそうではない。一般的な考え方でも、人間は死んでも何か残るという予想があるが、マルコが伝えたいことはそのような常識的なことではない。生きている

イエスの体験は、常識をひっくり返し言葉で言うのも難しい体験だ。その知らせは、神からだけ（天使を通して）ありうる。それは人間の知識、知恵、グノーシス、悟りよりもっと上のレベルのことだ。なぜなら、イエスは以前の命に戻ったのではなく、神の世界の命を生きているから。それを一瞥する体験をマルコは私たちに伝えたいのだ。そして、イエスを信じた人にも永遠の命が与えられるが、それは、それまでの命の回復ではなく、それ以上のことであり、神聖なもの。たとえばギリシア哲学でも靈魂の不滅について言われるが、その程度のものではない。それはそれまで誰も経験どころか聞くこともなかった真実だ。マルコと他の福音書記者たちは、私たちがこのようなことを知識として理解するために語っているのではない。彼らの第一の関心は、キリストの恵みによって私たちが同じことをすること。だから、私たちは信じて委ねるべきなのだ。

多くの信者にとって、復活祭は特別な祭ではあっても、お祝いの言葉やパーティやイースターエッグなど外面的に祝うだけだろう。そして、その日が終わったら、終わったのだ。復活祭はただの祭であり、生活にも世界にも影響のないものとして祝われる。それは、信者としての私たちの弱さを意味する。しかし、復活祭はただの祭ではない。教会にとっては、典礼を見ても、復活祭は長い霊的な旅の出発点だ。復活節の長い50日間のあいだ、典礼は、私たちが大きな石に塞がれた状態から空の墓を体験し生きたイエスに出会うように、さまざまな神の言葉を用意する。

イエスの故郷ガリラヤに行くとは、イエスの死を体験してからもう一度新しい目でイエスの

生涯を見直すということ。マタイ福音書では、イエスが指示しておかれた山に登ると言われている（28・16）。それは、最近パパ様が言ったように、初恋の場所に戻ることだ。だから、天使の指示は、新しい目でイエスを見るようにという勧めなのだ。私たちのところに来た神であるイエスを十分に受け入れる心を作るために復活節の50日間がある。

マルコ福音書の結末は、ハッピーエンドではなく、失敗を意味する。その結末が私たちに伝えるのは、復活の経験は、軽いことではなく、真剣なことだということ。逆に言うと、私たちは、キリスト者であったとしても、その体験をしておらず、イエスを本当に見ないで自分勝手な形で見ているという恐ろしい危険もある。キリスト者と言っても、イエスが復活していないような生活を送る可能性があるのだ。もう一つのエピソードを思い出すと、マタイ福音書によると、イエスが父なる神のもとに戻る昇天の時に、弟子たちのうちにまだ疑っている者もいたと言う。その可能性があるのが信仰の状態だ。私たちの信仰は、儀式や信心業、組織や行事、建物や掃除にあるのではなく、生きたイエスの体験にある。だから、今夜私たちが知った婦人たちの「恐れ」は、卵の祝福よりもずっと大切な宝物なのだ。

復活節の50日間、教会はさまざまな形で、イエスが生きているしるしに敏感になる（「目を開く」）教育をしてくれる。そして、イエスのように生きる力を与えてくれる。イエスは、有名で歴史に残っても死んだ人であるのではない。イエスは、私たちが愛する神、そして私たちが愛すべき生きている神。その方に会うことが復活祭なのだ。

オンライン日曜学校

「お〜い!」。画面に向かって、嬉しさと安堵から思い切り手を振り合いました。子どもではなく、大人が! 私は、電話も苦手で、何でも直接会って目を見て話さないと分かり合えないと頑なに思っていたアナログ人間でしたので、オンラインで繋がるなんて考えられませんでした。

フランシスコ教皇様の来日からわずか4か月ほどの昨年の3月、新型コロナウイルス感染拡大防止のためミサが中止になりました。テレワーク、ステイホームの呼びかけ、子どもたちにとっては突然の休校、先の見えない新型コロナウイルスの脅威に日常がすっかり変わってしまいました。そのような中で、日曜学校のリーダーの一人、佐々木さんがZoomを使ってのオンライン日曜学校を企画してくれました。

オンライン日曜学校は、ウィリアム神父様のお祈りで始まり、神父様にその日の福音の朗読、説明をしていただきました。リーダーからは『こじか』を使ってその日の福音や聖書からクイズを出したり、絵画を紹介したり、絵本を読んだりしま

マリア・フランシスカ T.Y. (日曜学校リーダー) した。子どもたちは、意外とすんなり Zoom を使いこなしていました。ミュートの ON/OFF の切り替えも上手ですし、バーチャル背景を楽しんでいる子もいました。あと何分などとタイムキーパーをしてくれる子もいました。紙とペン、○×カードを用意して積極的に質問に答えてくれました。40分という時間の制約がありましたので、途中でプツン! と切れてしまうこともありました。が、それもご愛敬で、同じ時間、同じ空間を皆で楽しむことができました。

私は、楽な方へと流されてしまう弱さがあるので、主日に教会にいかないことに自分が慣れてしまうのではないかと心配でした。そんな私をつなぎ止めてくれたのは、やはり子どもたちと神父様、リーダーたちの“信仰を子どもに伝える”という熱心な思いでした。主日のこの時間は、神様を賛美するために捧げる大事な時間として過ごすことができたことに感謝いたします。



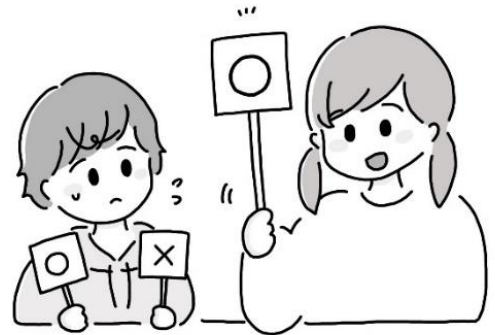
写真や聖書を使って分かりやすく教えてもらえた。
(マリア・イグナシア A.M. (小5))



絵の紹介やクイズがあっっておもしろかった。
(小さき花のテレジア M.W. (小5))

クイズをしながら色々学べて楽しかったです。
(モニカ M.S.(中2))

クイズはとても楽しく、またみんなとしたいです。
(アンナ A.S. (小5))



ぼくは、オンライン日曜学校にさんかして、とても楽しかったです。リーダーたちが毎週いろいろな○×クイズをだすところが一番おもしろかったです。
(フランシスコ M.M. (小3))

教会に行けないときにズームでお友達やリーダーに実際会ったかのような気持ちになりました。
(ポリナ C.H. (小5))



大阪に住んでいるので、なかなか教会に行けず
 いました。オンラインに誘ってもらったことで、
 普段よりもかえって気軽に顔を出すことが
 できました。日曜日になれば皆とお話したり、お祈り
 したりする習慣ができ、場所は離れていても、教
 会を身近に感じることができました。

(ミリアム N.Y. (社会人))

毎週参加はできませんでしたが、御ミサがない中
 で皆さんと繋がれた安心感、子供達の元気な姿が
 拝見できた事が何より嬉しかったです。『こじか』
 も教会に行けない、御ミサに預かれないのが当た
 り前になる不安の中での救いだったので感謝で
 す。

(フランチェスカ S.H. (日曜学校リーダー))

みんなと“集まる”ことができたのが一番よかつ
 と思います。特に学校がない間に、毎日同じよ
 うな日々が続いていましたが、日曜日に神父様の
 話を聞いたり、『こじか』を読んだりすることによ
 って、簡単に言えば、子どもたちにとって、普通
 だったらみんなと教会で集まってミサに与る日
 だなど思い出す大事な時間になっていたのでは
 ないでしょうか。

(アグネス B.S.日曜学校リーダー))

2回の御ミサ中止の中でも、日曜学校はオンライ
 ンで繋がっていたことは、大きな喜びとお恵みで
 した。神父様もほぼ毎回参加してお話をしてくさ
 いました。リーダーも知恵を絞り助け合って毎週
 できたことは本当に嬉しかったです。おかげで御
 ミサが再開した時、全く久しぶり感がなかったで
 す。また通常の日曜学校より出席者が多い日もあ
 り、ひとつの実りかと感じます。同時にオンライ
 ンは全員が同じ環境ではないので、取り残される
 家庭がないよう配慮の必要も感じました。どんな
 状況にあっても積極的皆が繋り分かち合ってい
 くことは大切だと実感しました。

(アグネス T.K.(日曜学校リーダー))

編集後記

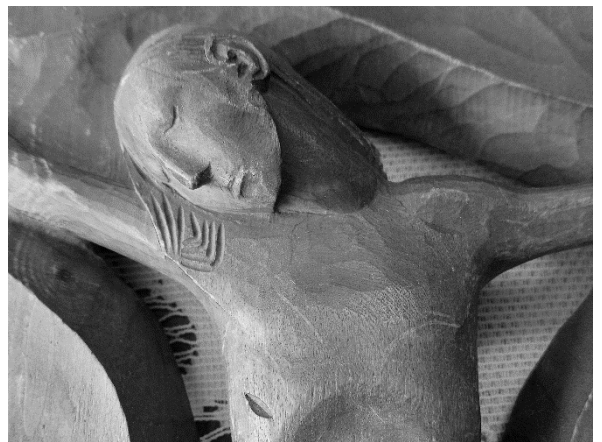
6年前、2015年の1月のことだった。ボアベール神父様が入院のため、ベリーニ神父様が3週続けてミサの司式をされた。それは降誕節が終わり年間が始まる頃で、その年読まれるマルコ福音書の箇所についてのベリーニ神父様の説教を連続して聞くことになった。ベリーニ神父様の説教は聖書のテキストに忠実で、当日の箇所だけでなく、福音書全体の流れにも目配りされる。それで、イエス様といっしょに歩む旅がこれから始まるという気持ちになり、ベリーニ神父様の説教を続けて聞くことができればよいのにと考えた。そして、数ヶ月後、教会ホームページに載せるためにベリーニ神父様から毎週お話をうかがうことができるようになった。お話ははじめは短かったが、少しずつ長くなり、かなりの長さのお話あるいは説教を聞いてまとめホームページに載せる作業を続けた。できない週はあったものの、B年のマルコからC年のルカ、A年のマタイ、そして再びマルコを読む2018年の典礼年の終わりまでだった。だから、マルコ福音書の多くの箇所については2回お話いただいたことになる。神父様は亡くなる少し前も「マルコ福音書はおもしろい」と言っておられた。特に復活徹夜祭の朗読箇所については、やる気満々で力を入れて準備してくださったので、3年前のベリーニ神父様のお話のまとめを今回 VIATOR に転載させていただいた。

亡くなる前の神父様自身、余命告知にショックを受けながらも「イエス様は本当に復活なさ

った」「死ぬのではなく変わる」とおっしゃった。吐血してティッシュを手に取りたいのに、ティッシュという言葉が出て来ず手だけバタバタ動かされる状態になっても、心配する私の顔を見て、「だいじょうぶ、イエス様がついている」とおっしゃった。最後の頃の病室での写真も残っているが、その顔は、神父様が大事にされ神父様といっしょに棺に入れられた十字架のイエス様のようにやさしい。

ベリーニ神父様が帰天され、自分自身の復活信仰を見つめ直さざるをえない。私はどう生きるか。マルコ福音書はたくさんの問いに満ちている。

(マリア・ヨハンナ M.M.)



上の写真はベリーニ神父様が司祭叙階後から持っておられた十字架のキリスト。木製で、ドイツで作られたもの。つらい時は抱いて休まれたと言う。神父様ご自身の希望により棺にいっしょに入れられた。